

会和紳紙



おりおりの記

オーガスタの思い出

野村ホールディングス
取締役会長

永井 浩二

「オーガスタ・ナショナル・ゴルフクラブ」。1年のうち2、3カ月しかオープンしないこの特別なプライベートコースで毎年4月に繰り広げられるマスターズ。2021年に松山英樹選手がアジア人初の優勝を果たしたことは記憶に新しい。翌2022年は2年ぶりに制限のない観客動員での開催となり、幸運にも私はトーナメント最終日の観戦と、その翌日のマンデープレーの機会に恵まれた。

この年のマスターズを制したのはS・シェフラーであったが、2位のR・マキロイが最終日に8アンダーで追いつけるなど、最後まで見せ場を作る熱戦となった。特に18番ホールで見せたバンカーからのチップインバーディーは、歴史に残る名シーンであり、興奮したマキロイが観客席に投げ込んだボールを、私の隣にいた日本から同行した方がキャッチしたことは、よい思い出である。

さて、マンデープレー当日は、早朝6時過ぎにプラクティスゾーンに集合し、バッグを担いでくれるキャディの指示で何発か打たされ、その事実上のテストを受けたのちコースに向かう。

オーガスタは一日の中に四季の移ろいを感じられると言われるが、熱戦の繰り広げられた前日と

は打って変わり、水を打ったように静まり返る早朝の森閑は、冬暁の美といった所か。

実際にラウンドすると、テレビでは感じないアップダウンの激しさがあり、フェアウェーを外れると松林下にはバークチップ

が待ち構え、いわゆるラフはほとんど無い。グリーンはボールがこぼれやすいよう全て順目に芝が刈られており、もちろん、ピンポジションは前日の決勝ラウンドと同じ位置だ。

圧巻は名物の「アーメンコーナー」。12番ショートホール、グリーンオンのポイントは畳1畳分とされており、運良く乗っても、その後のパットを誤ると、手前の池までボールが吸い込まれてしまう。キャディに指示を仰ぐと、ピンとはまるで違う方向に打てと言う。まさにアーメンと神に祈る思いで打ってみたところ、見事ピンそばに寄せることができた。記録によると、プロでも13打を叩いたとされるこのホール。ここをパーであがれたことは、私のゴルファー人生で最大の自慢である。(ちなみにこの日のトータルスコアは聞かないでほしい。)

球聖ボビー・ジョーンズが壮大な自然美を活かして創ったオーガスタを前に、自分という存在の未熟さを感じずにいられない挑戦の中、無為自然の境地をみた次第である。



▲マンデープレーのインビテーション